

ネット授業をはじめとする佐賀大学 e ラーニング20年の歩み

古賀 崇朗, 米満 潔, 永溪 晃二, 福崎 優子, 坊野 紗矢香

佐賀大学全学教育機構紀要 第10号
Journal of Organization for General Education
Saga University
Volume 10, 2022

ネット授業をはじめとする佐賀大学 e ラーニング20年の歩み

古賀 崇朗¹, 米満 潔¹, 永溪 晃二¹, 福崎 優子¹, 坊野 紗矢香¹

20 Year History of E-learning at Saga University, Including “Net Classes”

Takaaki KOGA¹, Kiyoshi YONEMITSU¹, Kouji NAGATANI¹,
Yuko FUKUZAKI¹, Sayaka BOUNO¹

要 旨

佐賀大学では、2001年に学内に「e ラーニングスタジオ」を設置し、2002年4月に単位が取得できる VOD 型のフル e ラーニングとして「ネット授業」を開始した。コロナ禍の現在では VOD コンテンツを用いた e ラーニングは珍しくないが、当時は全国的に見てもまだ珍しい取り組みであった。e ラーニングの推進に必要な学習管理システムの構築および運用管理、講義映像の収録や編集、VOD コンテンツ化を含めた全ての e ラーニングコンテンツの制作、学生や教員への支援を行ってきた。インターネット回線のブロードバンド化や PC の高性能化に加え、スタッフの技術力の向上にともなうコンテンツの品質向上と、さらに、学生の情報リテラシーの向上、メンターや TA によるサポート体制が整ってくると、次第に良い評価を得られるようになった。また、対面授業と組み合わせたブレンディッド型ネット授業の実施や、対面授業の補助として使う「科目履修用サイト」、教職員向けの「教職員 e ラーニングシステム」、「入学前学習サイト」「生涯学習」など、様々な e ラーニングを実施してきた。本稿では、筆者らがこれまで20年間にわたり取り組んできた様々な e ラーニングの実践について報告する。

【キーワード】 e ラーニング、LMS、オンライン授業、FD/SD、入学前教育、生涯学習

1. はじめに

佐賀大学（以降「本学」と記す）では、2001年に学内に「e ラーニングスタジオ」を設置し、2002年4月に単位が取得できる VOD（Video On Demand）型のフル e ラーニングとして「ネット授業^①」を開始した。コロナ禍の現在では VOD コンテンツを用いた e ラーニングは決して珍しくないが、当時は全国的に見てもまだ珍しい取り組みであった。e ラーニングの推進に必要な学習管理システム（LMS：Learning Management System）の構築および運用管理、講義映像の収録や編集、VOD コンテンツ化を含めた全ての e ラーニングコンテン

1 佐賀大学 全学教育機構

ツの制作および学生や教員への支援を、eラーニングスタジオが中心となって進めてきた。

開始当初、学内における評価はそれほど高くなかったネット授業だが、インターネット回線のブロードバンド化やPCの高性能化に加え、スタッフの技術力の向上にともなうコンテンツの品質向上と、さらに、学生の情報リテラシーの向上、メンターやTA（Teaching Assistant）によるサポート体制が整ってくると、次第に良い評価を得られるようになった^{(2) (3)}。また、ネット授業と対面授業を交互に組み合わせたブレンディッド型ネット授業は、質の高い教育を実現できることが明確になってきた⁽⁴⁾。

ネット授業で得られた知見を活かし、対面授業の補助として活用するためのLMSである「科目履修用サイト⁽⁵⁾」や教職員向けの「教職員eラーニング⁽⁶⁾」、「入学前学習サイト⁽⁷⁾」「生涯学習」など、eラーニングを活用した様々な教育支援を行ってきた。他にも、「佐賀県内の大学・短大の連携による」大学コンソーシアム佐賀へのネット授業の提供や、佐賀県自治収集所との共同研究による「職員研修におけるeラーニング活用に関する研究⁽⁸⁾」などを行ってきた。また、eラーニングスタジオでは、VODコンテンツを用いた非同期型の遠隔授業だけでなく、Web会議システムやTV会議システムを用いた同期型遠隔授業の実施やサポートも行ってきた。（改組等により現在は、全学教育機構の高等教育開発室 教職員能力開発部門のICTメディアグループとして各種eラーニングの運用や各種オンライン授業のサポート等を行っている。）

さらに、波及効果はeラーニングに留まらず、「ネット授業」のコンテンツ開発やシステムの運用で得られた知見を、デジタルコンテンツ制作の教育へと展開し、社会人の学び直し「佐賀大学デジタルコンテンツ・クリエイター育成プログラム⁽⁹⁾」や、学生の教育へ展開した「デジタル表現技術者養成プログラム⁽¹⁰⁾」や「クリエイティブ表現プログラム」を実施した。

また近年の、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大の影響により、本学でも2020年度の授業は対面でなければ実施できない許可された科目を除き、基本的に授業はオンラインで実施した。インターネットを活用したオンライン授業（遠隔授業）は、大学設置基準において単位数の上限を設けて認められている講義形態である。コロナ禍の影響で、2020年度および2021年度は、特例として60単位の上限への算入は不要とする特例措置が講じられている⁽¹¹⁾。2021年度は対面授業中心に戻ったが、教室の人数等の制限への対応や、オンラインの方が教育効果の高い科目などはオンラインで実施するなど、対面と遠隔の双方の利点を組み合わせ、柔軟に対応している⁽¹²⁾。また、対面の科目であっても、感染拡大の状況に応じてオンラインで実施している。学生の授業だけでなく教職員の研修等でもオンライン化の需要が高まっており、ここでも教職員eラーニングの存在が役立っている。本稿では、筆者らがこれまで20年間にわたり取組んできた「ネット授業」をはじめとする様々なeラーニングの実践について報告する。

2. 様々なeラーニングの展開

筆者らは、学生向けのeラーニングサイトとして「ネット授業」および「科目履修用サイト」の2サイトを運用している。また、教職員を対象とした「教職員eラーニングシステム」や、「入学前学習サイト」を運用している。筆者らが運用している様々なeラーニングサイトを表1に示す。なお、本稿の表中の利用者数はユーザの重複ありの数値であり、同一ユーザが複数のコースで受講している場合がある。本章では、それぞれのシステムの用途や特徴について概要を述べる。

表1 各種eラーニングサイトの利用状況等（2021年度）

No.	サイト名	対象	用途	利用者数	備考
1	ネット授業	学生	VODコンテンツを活用したフルeラーニング	約1,100	農業版MOTプログラムの科目も含む
2	科目履修用サイト	学生	対面授業の補助	約7,300	現在はオンライン授業でも利用
3	教職員eラーニングシステム	教職員	教職員の研修等	約8,000	
4	入学前学習サイト	入学予定者	入学前教育	約660	
5	佐賀デジタルミュージアム	一般市民	生涯学習	—	現在は休止中

2.1 ネット授業

ネット授業の開始当初から、筆者らは本学で実施しているVODコンテンツを用いたフルeラーニング（もしくはブレンディッドラーニング）を「ネット授業」と呼んでいた。しかし、COVID-19の感染拡大によりオンライン授業が一般化したことで、2020年度および2021年度において、VODコンテンツを用いたフルeラーニングの授業科目は数多くあることから、本稿では、ネット授業サイトで開講しているVODコンテンツを用いたフルeラーニング科目を「ネット授業」科目と呼んでいる。

ネット授業は、授業の設計や教材の開発時のメンターやクリエイターらサポートスタッフの協力によるコンテンツ開発や、授業開講時にはTAによる受講状況の確認や学生への催促等、手厚いサポートが特徴である。教員の授業をスタッフがビデオ収録・編集し、専用の配信サーバから配信する。このVODコンテンツと小テストやミニレポート等の課題と組合せ、学修を行う。教養教育科目を中心に開講しているが、大学院の開講科目や社会人を対象とした農業技術経営管理学（農業版MOT）教育プログラム⁽¹³⁾でのeラーニング（オンデマンド）科目の実施にも利用している。2021年度は農業版MOT教育プログラム科目を含め15科目が運用されており、およそ1,100名の学生が利用している。

2.2 科目履修用サイト

「ネット授業」サイトと同じく、学生を対象としたeラーニングサイトである。対面授業の補助でLMSを活用することを主な目的として2007年度に提供を開始した。ネット授業とは異なり、科目担当の教員は自身で利用者の登録や教材を配置する必要がある。ネット授業ほどの手厚いサポートはないが、教材開発やLMSの機能・使い方等の相談には随時対応している。「科目履修用サイト」の提供開始以前に、高校時代に履修していなかった科目あるいは理解が十分ではなかった科目について大学初年次に学習するためのeラーニングとして「リメディアル教育用サイト」も運用していた。これら2つのサイトは、対象や利用目的が類似していたため、「科目履修用サイト」に統合した。

2020年度以降のコロナ禍での教育においてはオンライン授業用のLMSとしての利用も多い。2021年度は、計102個のコース(科目)が運用されており、延べ7,299名の学生が利用している(表2)。開設コースの内訳としては、理工学部専門科目及び、教養教育科目が中心となっていて、大学院では自然科学系研究科共通科目や、先進健康科学研究科、理工学研究科の科目で利用している。

科目履修用サイトの利用方法として、これまでは資料の配布や課題の提出、アンケートとしての利用が多かったが、コロナ禍となり、リアルタイム型オンライン授業でのWeb会議のリンクや、Microsoft Stream⁽¹⁴⁾等を用いたオンデマンドのビデオ配信のリンク等でも使われている。

表2 科目履修用サイトの利用状況(2021年度)

No.	カテゴリー	学期	コース数	学生数
1	教養教育	前学期	18	1,220
2		後学期	16	907
3	理工学部	通年	5	790
4		前学期	33	2,470
5		後学期	24	1,524
6	研究科*	前学期	4	378
7		後学期	2	9
計			102	7,299

※自然科学系研究科共通科目及び先進健康科学研究科、理工学研究科

2.3 教職員eラーニングシステム

このシステムについての詳細は、全学教育機構の紀要第9号で述べた⁽¹⁵⁾ため、ここでは、2021年度の実施状況を簡潔に述べる。元々は財務課による研究費不正の防止のための「コンプライアンス教育」を実施するために、教職員用の部分を科目履修用サイトから独立させたものである。現在はコロナ禍の影響もあり、需要が高まっている。2021年度は人事課の依頼による「ハラスメント防止研修」実施したほか、例年実施している財務課の「コンプライアンス教育」、ダイバーシティ推進室の依頼による「無意識のバイアス(仮)」の2022年度の実施に向けた準備を行っている。なお、「無意識のバイアス(仮)」については、学生も対象とし、学生向けeラーニングでも実施予定である。それ以外でも、新任教員研修や、教育改善支援取組みの報告ビデオの配信や、筆者らが毎年行っているオフィス活用講座などFD/SD(Faculty Development/ Staff Development)での利用も行っている。2021年度の利用状況を表3に示す。

表3 教職員 e ラーニングシステムの利用状況 (2021年度)

No.	コース区分	開講時期	利用者数	備考
1	ハラスメント防止研修	10月中旬～	約3,000	
2	コンプライアンス教育	2月中旬～	約2,000	予定
3	無意識のバイアス	2022年度	約3,000	2022年度実施予定
4	教育改善支援取組	6月上旬～	約2,000	令和2年度の教育改善支援取組の報告ビデオ
5	新任教員研修	1月上旬～	73	2020年度・2021年度の新任教員が対象
6	オフィス講座	12月下旬～	37	対面で実施する講座の資料配布等

2.4 入学前学習サイト

2011年度に理工学部の入学予定者向けに始まった入学前学習サイトは、2021年度（2022年度入学予定者向け）では、「医学部」を除く「理工学部」「教育学部」「芸術地域デザイン学部」「農学部」「経済学部」の5学部、およそ660名が利用している（表4）。教材は小テストが中心となっていて、理工学部は学部の教員が作成した問題を利用し、理工学部以外の学部は、本学も幹事校として加盟する「大学eラーニング協議会」が有償で提供する「共通基盤教育」の教材⁽¹⁶⁾を利用している。「共通基盤教育」の教材は、千歳科学技術大学、山梨大学、愛媛大学、佐賀大学、北星学園大学、創価大学、愛知大学、桜の聖母短期大学が連携して取り組んだ大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進⁽¹⁷⁾（以降「8大学」と記す）」（2012年度～2016年度）で開発した教材で、本学もその開発に深く関わっている。

例年、8月から9月の夏季休業期間中に（必要に応じて）システムの準備を行い、9月も

表4 入学前学習サイトの利用状況 (2021年度実施分)

No.	学部	区分	コース教材	開講時期	利用者	備考
1		学校推薦型1	高校数学（学部オリジナル）	1月上旬	60	
2		総合型2	高校数学（学部オリジナル）	2月中旬	53 ^{*2}	昨年度の数値
3	理工	一般・前期日程	高校数学（学部オリジナル）	3月中旬	308 ^{*2}	昨年度の数値
4		一般・後期日程	高校数学（学部オリジナル）	3月下旬	136 ^{*2}	昨年度の数値
5		高校教員確認用	高校数学（学部オリジナル）	1月上旬	—	高校教員用
6	教育	総合型1	非言語SPI、日本語、英語（8大学）	12月中旬	4	
7	芸術 ^{*1}	総合型1	非言語SPI、日本語、英語（8大学）	11月下旬	25	
8			高校数学（8大学）		3	
9			【英語】基礎がためリスニング（8大学）		3	受講者は8と同一
10	農	学校推薦型1	高校3年数学（8大学）	12月中旬	2	
11			高校数学（8大学）		1	
12			【英語】基礎がためリスニング（8大学）		1	受講者は11と同一
13	経済	学校推薦型1	高校数学（8大学）	1月上旬～	68	
14			【英語】基礎がためリスニング（8大学）		68	受講者は13と同一

※1：芸術地域デザイン学部

※2：一般入試入学者はまだ未確定のため、2020年度の数値

しくは10月から各学部の入學予定者の受講用のコースの準備を行っている。現状では、各学部の入學前学習開始の時期がずれていることもあり、準備作業時期が分散されるため、大きな負担にはなっていない。ただし各学部によって合格者に対する入學前学習の実施スタイルが異なるため、それらに合わせた教材の設定や準備を行う必要があり、統一した運用が行いづらい点が課題として挙げられる。理工学部のコースには、学校推薦合格者の高校の担当教員が実際の教材を確認するためのコースも準備している。本サイトは入學前の高校生を対象としていることもあり、小テストの表示を1問ごとにページを区切るなど、スマートフォンからのアクセスを前提として構築している。

2.5 生涯学習（学外の一般市民向けのeラーニング）

学内向けのeラーニングだけでなく、学外の一般市民向けのeラーニングも「佐賀大学eラーニングスクール⁽¹⁸⁾」や「佐賀デジタルミュージアム⁽¹⁹⁾」など、形態を変えて不定期に行ってきた。これらの活動に関するWebサイトは閉鎖し、現在は活動を行っていないが、本学では2019年度に生涯学習センターが全学教育機構内に設置され、本学の授業を一般市民へ開放する授業開放や公開講座等を行っている。

本学における地域貢献推進事業の一環として、ネット授業を生涯学習として一般市民に開放する試みを2002年度から不定期に行ってきた⁽²⁰⁾。2007年度に実施した「佐賀大学eラーニングスクール」は、eラーニング（無料）とスクーリング（受講料4,000円）を組み合わせ、当時としては珍しい形式であった。eラーニングは実際にネット授業で提供している科目3科目を含む計13講座を提供した。スクーリングは「佐賀学」や「有田焼入門（現地での絵付け体験を含む）」などの4講座を提供した。eラーニング科目は必修5科目＋選択5科目以上に合格し、2回以上のスクーリングを修了した受講生には「佐賀大学eラーニングスクール：佐賀と技コース」の終了証を発行した。

佐賀デジタルミュージアムは、筆者らがこれまでに開発してきた、佐賀の伝統工芸や歴史文化について学ぶことができるデジタルコンテンツを中心にアーカイブし、Web上で検索し閲覧できるデジタルミュージアムであった。本ミュージアムの目的は、地域の歴史や文化・生活を記録し、それらを地域住民だけでなく遠隔地にいる人にも提供することで、様々なコンテンツの保存・整理・公開に積極的に活用し、地域の歴史や文化の保存・継承・発信に寄与するものである。また、本ミュージアムには専用のeラーニングサイトも設けており、生涯学習や反転授業における学習教材、ツーリズムや観光など、多様な目的で活用が行われた。

3. ネット授業 VOD コンテンツの歩み

ネット授業では、対面の講義の代わりに利用するVODコンテンツも時代に合わせ変化を遂げてきた（表5）。2002年度に始まったネット授業は、LMSとして地元の企業のグループウェア「NetWalkers」をeラーニング用に共同開発し利用していた。配信するVODコン

テンツは RealMedia 形式のビデオを用いていた。コンテンツのオーサリングには SMIL (Synchronized Multimedia Integration Language) を用いていた。その後、2005年の後学期より LMS を Moodle⁽²¹⁾ に変更した。その際に Microsoft Producer for PowerPoint を使いオーサリングを行い VOD コンテンツも Windows Media を用いるようになった。しかし、Mac OS に対応していないなどの課題もあり、2007年度には Mac OS にも対応している Flash と FLV (Flash Video) を用いたコンテンツへと変更を行った。2010年度にはコンテンツのテンプレートを更新し、ビデオの形式もより高画質なものへと変更した。システムも Shibboleth⁽²²⁾ を用いた SSO (Single Sign-On) に対応させるなど、より高機能なものへと更新した。しかしその Flash もセキュリティ面でのリスクが言われるようになったことから、2016年度後学期より VOD コンテンツを HTML 5 へ変更し、現在では MP 4 形式のビデオを利用している。

ネット授業では、これまで一貫してスマートフォン等の小型のタブレット端末からの視聴は認めていない。コンテンツの文字の大きさや解像度等の関係もあり、小さい画面サイズでの視聴を想定した設計になっていない。本学では PC 必携化を進めており、ましてコロナ禍の現在、ネット授業の学習環境は揃っているはずである。しかし、学生からの問合せ内容や学期終了時のアンケート調査の結果から判断すると、多数の学生はスマートフォンから視聴しているという現実もうかがえる。

2002年度の VOD コンテンツを図 1 に、2021年度現在の VOD コンテンツを図 2 に示す。両コンテンツを比較しても、配置は異なるが、ビデオ (音声) とスライド、目次等を組み合わせ構成して、この構成は20年間変わっていない。すべてを映像として配信する構成でな

表 5 ネット授業における VOD コンテンツの変遷

No.	開始年度	LMS	ビデオ形式	オーサリング	備考
1	2002	NetWalkers	RealMedia	SMIL	
2	2005	Moodle	Windows Media	Producer+SMIL	SMILE コンテンツも一部併用
3	2007	Moodle	FLV	Flash	
4	2010	Moodle	FLV	Flash	3 を全面リニューアル
5	2016	Moodle	MP 4	HTML 5	

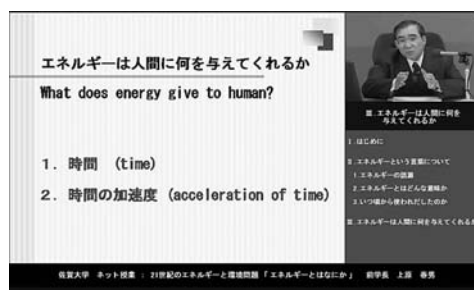


図 1 ネット授業 VOD コンテンツ (SMIL)



図 2 ネット授業 VOD コンテンツ (HTML5)

いので、コンテンツのデータ量はかなり抑えられた作りになっている。昨今のビデオ教材は、単一のビデオとして配信することが多いが、「ネット授業」の VOD コンテンツは「データダイエット」が叫ばれるコロナ禍でも低負荷で運用できている。

4. コロナ禍における運用と変化

これまでに述べてきたように、本学では2020年度のいわゆる「コロナ禍」の以前から e ラーニングを実施してきた。その中で、ネット授業はこれまでと同じ方式・ルールで運用している。既に15年以上の歴史を持ち、特に運用スタイルを変えなくても実施できたためである。その一方で筆者らは、これまでオンライン授業を行ってこなかった教員へのオンライン授業実施におけるサポートを、ネット授業やそれ以外の自身の授業科目の準備よりも優先的に行わざるを得なかった。本章では、ネット授業科目における学期終了時のアンケート調査の回答を元に、特徴的な部分について記述する。

4.1 集中や理解のしやすさ等

ネット授業について、対面授業と比較しての「集中のしやすさ」「理解のしやすさ」「講義の進行速度」「質問のしやすさ」「教員のフォロー」「講義の難易度」について調査している。各項目とも評価は5件法で、「非常に悪い」「悪い」「普通」「良い」「非常に良い」の5段階である。2020年度の結果（n=725）を図3に示す。

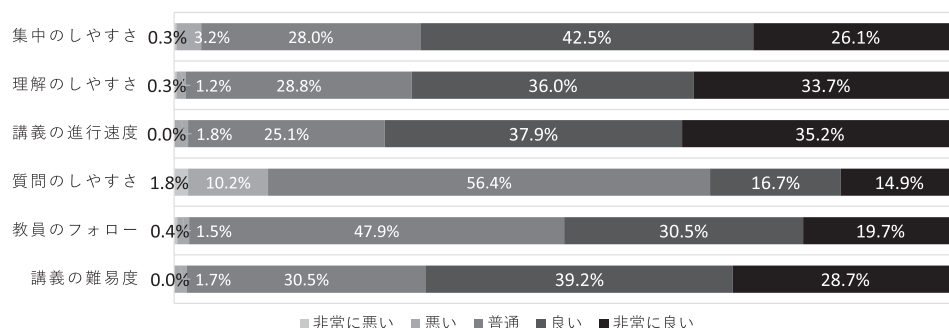


図3 学期終了時のアンケート調査結果（2020年度）

開講科目等が異なるため一概に比較はできないが、10年前の2010年後学期と比べて若干良い評価の割合が高くなっている。また、2010年度後学期でも似た傾向であったが、「質問のしやすさ」の項目のみ、「悪い」の評価が10%程度ある。ネット授業では、サポート用のメーリングリストを案内している他、LMSの「フォーラム」の機能をカスタマイズし、教職員からの連絡を行う（学生は書き込めない）「掲示板」と、学生からの質問やディスカッション等を行える「談話室」を各コースに設けているが、ほとんどの科目であまり使用されていない。今後も、より良い手法を検討していきたい。

4.2 メールチェック

本学では、教職員から学生への連絡手段として、主に「教務システムからの通知」や「学籍番号のメールアドレス（以降「学籍番号メール」と記す）へのメール」の2種類を使用している。教務システムに学生は任意のメールアドレスを登録でき、スマートフォンで確認できるメールアドレスを登録している場合が多い。ネット授業での未視聴や未受験・未提出等は、LMSから学籍番号メールへ、メッセージが送られる。そのため、ガイダンスでは学籍番号メールも確認するように説明しているが、確認しない学生も一定数存在し、せっかくの通知が有効でない面もあった。重要な通知や他の授業での通知は、教務システムから届くことが多く、重要度が低いためである。アンケート調査では、学籍番号メールのチェックについての設問も設けている。評価は「チェック方法が分からない(知らない)」「まったくチェックしていない」「時々チェックしている」「毎日チェックしている」の4段階である。2018年度（n=1,259）、2019年度（n=700）、2020年度（n=725）の結果を図4に示す。

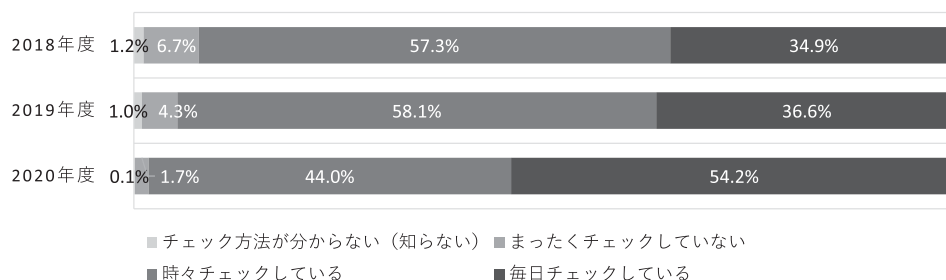


図4 学籍番号メールのチェック頻度

「チェック方法が分からない(知らない)」や「まったくチェックしていない」と回答した学生の割合は、2018年度はおよそ7.9%、2019年度はおよそ5.3%だったが、コロナ禍の2020年度ではおよそ1.8%にまで減少している。コロナ禍になったことで、学籍番号メールを確認する学生の割合は明らかに増えている。ネット授業だけでなく、他のオンライン授業で使う機会が増えたことや、Microsoft Teams⁽²³⁾等の Microsoft 365⁽²⁴⁾のサービスを利用する授業が増え、学籍番号メールを扱う機会が増加したこと（使わないと単位の取得に関わるようになったこと）等が推測される。それでも、「チェック方法が分からない(知らない)」と回答する学生がまだ存在する点は課題である。

4.3 単位取得率

2019年度にネット授業で開講された基本教養科目（9科目1,090名）ではおよそ75%であった。2020年度は同じ科目構成（9科目、1,026名）で、単位取得率はおよそ81%であった。コロナ禍となり、ほとんどの授業科目がオンラインで開講され、科目による受講方法やルールの違い等もある。混乱等によって受講を途中で諦める学生が増えないか心配であったが、むしろ例年よりも、他の授業との違いなどを認識し、丁寧に受講しているように思えた。も

もちろん、単年度の結果だけでなく、2021年度の結果も含めて注視していきたい。

開講科目が同じではないので一概に比較はできないが、2018年度はおよそ79%の単位取得率となっていて、2010年度の73%から比べると若干ではあるが上昇してきている。これは、この10年間でネット授業を受講する環境が当たり前になってきたことや、単位取得の意思のない学生に対して履修登録の解除を促したことにより、10年前に課題として挙げていた、「放棄」の数が減少した可能性も考えられるが、現在は放棄も不可として成績登録しているため、その区別ができない。

4.4 自由記述のコメント

ネット授業全体についての自由記述のコメントでは、例年コメントする学生はごくわずかではあるが、2018年度前学期～2021年度前学期のコメントでは、以下のような趣旨のものが複数見られた。

- ・自分の都合に合わせて学習できた
- ・ネット授業科目をもっと増加して欲しい

これらの意見については例年見られていて、コロナ禍によってオンライン授業が当たり前になったが、その中でもネット授業の良さについて改めて評価されたようだ。また、2020年度のコメントには「コロナ禍によるオンラインへの対応が遅れたりする科目もある中、非常に分かりやすかった」や「体調が悪い時でも時間を調整して受講できた」といった趣旨のコメントもあった。ネット授業は毎年度開講される前提で構成されており、設定されたスケジュール通りに品質を下げることなく授業を提供できた。しかし、ネット授業として提供している科目は、教養科目の再編や担当教員の退職等で減少し、コンテンツを開発できる教職員の減少等によって近年は新規開講しておらず減少傾向である。また、「教養科目だけでなく、専門科目でも増やしてほしい」という声も例年聞かれるが、対応できていないのが現状である。

また、2020年度のコメントには以下のようなものが複数あった。

- ・授業の連絡をメールで送ってほしかった
- ・課題の未提出を事前に知らせてほしかった

コロナ禍になり、ネット授業に限らず、教室の場所や今週の授業が対面かオンラインかなどの連絡を送ってほしいという声が多く聞かれている。しかし、ネット授業ではLMSにアクセスすれば情報は全て手に入る。LMSへのリンクもシラバスに記載しているし、受講上の注意事項をまとめたガイダンスも配信している。最初の週には教務システムからの通知も例年通り行っている。以前は学生が教務のWebページや教務課の窓口、各学部等の連絡用掲示板に自ら足を運んで情報を確認することが当たりまえだったことを考えると、情報待ち（必要な情報が届いて当たり前）の状態になっている学生が増加しているようにも感じている。それ以外には、似たような内容で以下のものがあった。

- ・最初は期限に気づかないことがあり、その時にすぐにメールが来たのは良かった

・授業によって手段が異なり分かり辛い

ネット授業では一定時間おきにチェックポイントを設けるなど、かなり細かい視聴状況の確認を行っている。そして先に述べた通り、TAが受講学生のコンテンツ視聴や課題等の提出状況を確認し、未視聴・未受講の学生には、受講の催促を行っている。しかし、2020年度以降、ネット授業以外のVODコンテンツを用いたオンライン授業科目では、ネット授業のような視聴履歴等の細かい確認は行わない科目も多い。そのため、学生にとってはVODコンテンツを用いたオンライン授業であっても、ネット授業とそれ以外の科目では教員からのチェックや指導が異なる面があり、戸惑うこともあったと推測される。

本学でのオンライン授業の実施方法については、各教員の選択によって様々なスタイルで実施されている。複数のツールを使用するため、当然、様々な情報にアクセスし、使用するツールについて理解しておく必要がある。コロナ禍において様々なツールが存在したことは、教員にとって、授業に応じて様々なスタイルのオンライン授業を実施できる点では良いが、学生にとっては様々なオンライン授業のスタイルが混在し、紛らわしい面はあったようだ。

5. まとめと今後の展望

本稿では、筆者らがこれまで20年間にわたり取組んできた「ネット授業」をはじめとする様々なeラーニングの実践について述べた。新型コロナウイルスの影響は非常に大きく、未だに終息の気配を見せない。そのような中、2020年度はオンライン授業が一般的なものとなり、多くの大学の授業がリアルタイムやオンデマンド等のオンラインで行われるようになった。本学でも2021年度は対面授業中心に戻ったが、教室等人数制限や、対面授業も状況によってはオンラインに切り替えるなどの配慮を行っている。教室等の人数制限については、各大学で緩和や撤廃の動きもあるが、当面は対面授業であっても、必要に応じてオンラインへ切り替えられる体制は維持する必要がある状況だ。そのような中、安定した運用を継続しているネット授業は、そのスタイルを変えることなく運用することができている。今後はポストコロナを見据えつつ、オンラインに適した新しい学びのスタイルへの転換も意識しながら更なる発展を目指したい。

本稿で述べたeラーニングシステムは、これまでは各種GP (Good Practice)⁽²⁵⁾をはじめとする様々な補助金や概算要求などの資金獲得によってここまで維持してきた経緯がある。しかし本稿で述べたように既に様々な場面でeラーニングを活用しており、なくてはならないものとなっている。教職員eラーニングシステムも現在のコロナ禍の影響もあり、需要の高まりを強く感じている。一方で、本学では全学的なeラーニングに携われるスキルを持った人員が減少し、システムの運用やコンテンツ開発等の対応に割ける人員が少ないという点は大きな課題である。今後も安定して運用を続けるためには、サポートスタッフの確保を含めた、各種eラーニングの維持のための定常的な予算の確保も必須の条件である。そのためには、これまでも進めてきたシステムの整理・統合を更に進める必要がある。特に学生向

けのeラーニングについては、現在導入を進めている「オンライン試験監督システム(仮)」への統合を行うなど、整備を進め、ポストコロナへ向けた新たな学習環境を構築していきたい。

謝辞

本稿で述べたeラーニングの実践は、全学教育機構 ICT メディアグループの教務補佐員および教員の尽力によるものである。また、LMS のコース運用については、各部署の担当職員の協力を得ながら運用を行っている。最後に、20年の歴史を持つ本学のeラーニングを支えてきたすべての関係者に対し、この場を借りて改めて感謝の意を表す。

引用・参考文献

- (1) 佐賀大学 ネット授業：<http://netwalkers.pd.saga-u.ac.jp/> (2022/01/17アクセス)
- (2) 穂屋下 茂，角 和博，江原由裕，米満 潔，藤井俊子，久家淳子，池上 仁，池田絵美，梶原 しおり，朴 逸子，時井由花，古賀崇朗，梅崎卓哉，近藤弘樹：eラーニングコンテンツの制作と多分野での利用について，メディア教育開発センター，メディア教育研究，3-2 (2007)，85-94
- (3) 古賀崇朗，藤井俊子，中村隆敏，角 和博，高崎光浩，大谷 誠，江原由裕，梅崎卓哉，米満 潔，久家淳子，時井由花，河道 威，本田一郎，永溪晃二，田代雅美，穂屋下 茂：“教養教育におけるネット授業の展開”，大学教育年報，佐賀大学高等教育開発センター，No. 8 (2012)，33-45
- (4) 藤井俊子，米満 潔，古賀崇朗，早瀬博範，宮島 徹，西村 雄一郎，穂屋下 茂，角 和博，近藤弘樹：eラーニングを効果的に利用したブレンディッド型ネット授業の実践報告，大学教育年報，佐賀大学高等教育開発センター，No. 6 (2010)，80-86
- (5) 佐賀大学 科目履修サイト：<http://netwalkers.pd.saga-u.ac.jp/elearning.html> (2022/01/17アクセス)
- (6) 佐賀大学 教職員eラーニング：<https://ncsv3.pd.saga-u.ac.jp/elearning2/> (2022/01/17アクセス)
- (7) 佐賀大学 入学前学習サイト：<https://www2.clc.saga-u.ac.jp/hs4/> (2022/01/17アクセス)
- (8) 古賀崇朗，田代 雅美，梅崎 卓哉，穂屋下 茂：職員研修におけるeラーニングの実践，2017九州PCカンファレンス in 北九州，北九州市立大学 (2017)，7-8
- (9) 穂屋下 茂，久家淳子，時井由花，永溪晃二，古賀崇朗，河道 威，米満 潔，藤井俊子，本田一郎，五十嵐 勉，中村隆敏，高崎光浩，角 和博，近藤弘樹：社会人対象のデジタルコンテンツ・クリエイター育成プログラムの実践，大学教育年報，佐賀大学高等教育開発センター，No. 6 (2010)，52-65
- (10) 古賀崇朗，中村隆敏，藤井俊子，高崎光浩，角 和博，河道 威，永溪晃二，久家淳子，時井由花，田代雅美，米満 潔，田口知子，穂屋下 茂：就業力を育むデジタル表現技術者養成プログラムの実践，全学教育機構紀要，佐賀大学全学教育機構，創刊号 (2013)，79-91

- (11) 本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について：
https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2022／01／17アクセス）
- (12) 令和3年度後学期の授業の実施について（2021.10.05更新）
<https://www.sc.admin.saga-u.ac.jp/covid-19-tostudents.html#1>（2022／01／17アクセス）
- (13) 農業技術経営管理学（農業版 MOT）教育プログラム：
<https://www.ag.saga-u.ac.jp/MOT/>（2022／01／20アクセス）
- (14) Microsoft Stream：<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365/microsoft-stream>（2022／01／17アクセス）
- (15) 古賀崇朗：教職員研修における LMS の活用，佐賀大学全学教育機構紀要，佐賀大学全学教育機構，第9号（2021），95-106
- (16) 共通基盤教育とは：<https://uel.jp/system/>（2022／01／17アクセス）
- (17) 大学間連携共同教育推進事業 | 学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進：<https://eight-univ.spub.chitose.ac.jp/>（2022／01／13アクセス）
- (18) 佐賀大学 e ラーニングスクール：
http://www.saga-u.ac.jp/somu/elearning_s0719.pdf（2022／01／17アクセス）
- (19) 古賀崇朗，田代雅美，米満 潔，河道 威，永溪晃二，梅崎卓哉，中村隆敏，角 和博，高崎光浩，穂屋下 茂：地域の歴史や文化を保存・継承・発信する佐賀デジタルミュージアムの構築，佐賀大学全学教育機構紀要，佐賀大学全学教育機構，第4号（2016），165-173
- (20) 穂屋下茂：ネット授業を活用した生涯学習環境の構築，生涯学習の総合情報誌『マナビィ』文部科学省，No. 49（2005），36-39
- (21) Moodle：<https://moodle.org/>（2022／01／17アクセス）
- (22) Shibboleth，学認を知ろう：<https://www.gakunin.jp/sites/default/files/2019-10/camp-otani%20%281%29.pdf>（2022／01／17アクセス）
- (23) Microsoft Teams：
<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-teams/group-chat-software>（2022／01／23アクセス）
- (24) Microsoft 365：<https://www.microsoft.com/ja-jp/microsoft-365>（2022／01／23アクセス）
- (25) GP とは？：https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp/001.htm（2022／01／17アクセス）

※本稿に記載されている内容は原稿執筆時点（2022年1月下旬）での内容であり、今後内容が変更になる場合がある。

※本稿に記載されている社名、商品名、サービス名は、各社が商標または登録商標として使用している場合がある。